

# せいとみち 聖徒の道



1968年12月号

こどものため



## クリスマスのおともだち

ミルドレッド・グレニャー

これは、オランダのおはなしです。こおりのはったうんがをスケートで、手をつないで、わっただて行きながら、カトリーナとヒルダは、うれしそうに、にっこりと笑いました。

カトリーナはかたほうの手に、明かるい赤の毛糸で出来ている手ぶくろをもっていました。それは、カトリーナが学校がおわってから、ヒルダの家で、あみ終わったばかりのものです。ヒルダも、いっしょにあんだばかりの、かわいい赤のぼうしを持っていました。「あした、この手ぶくろをもらったら、ジュ

リアンナはよろこんでくれるかしら？」とカトリーナはききました。「もちろんよ、だけど、ジュリアンナはこの赤い帽子的組み合わせを気にいるかしら？ねえ、カトリーナ、あしたの学校で、おくり物をこうかんするのがとても待ちどろしいわ。ジュリアンナは私たちをとくべつなお友だちに、えらんでくれるでしょうね。」あすは12月5日でした。その日は、オランダでは、だれもが、サンタ・クロースのたんじょうびをいいうのです。学校のじゅぎょうが終わると、生徒たちは、プレゼント

をこうかんしあい、それから、楽しい夜のために急いで家に帰ります。夕食がすむと大きな白い馬にのって来るというサンタ・クロースの来る用意をします。サンタ・クロースには、ちゅうじつなおとものブラック・ピーターがついています。サンタ・クロースはよいこどもたちにはプレゼントをおいて行ってくれるけど、いたずらで、言うことを聞かない子たちはブラック・ピーターにむちでうたれるのです。その2人の女の子たちが、スケートをしなが、うんがのまがりかどに来たときに、うんがのそばの小さな家に、だれかが入って行くのが見えました。

そして、小さなあかりが、われ目のあるまどから光っているのが見えました。ひびの入ったえんとつからは、かすかにけむりが、うずまいてのぼっていました。「だれが入っていったのかしら？」とカトリーナがききました。ちょうどその時、カトリーナや、ヒルダと同じくらいの年の女の子が、その小さな家の角口に出て来ました。女の子の着ている青いうわぎは、ちょっとみじかすぎるようでした。そして、ぼうしをかぶっていないので、黄色いふわふわしたかみの毛が風にふかれて、かおにかかっています。その子は、カトリーナとヒルダを見ると、くると後を向いて家の後へ走って行きました。カトリーナは、悲しそうに、頭をふって「あんな小さな家にすむのはいやだわ、でもあの子はだれかしら？」といいました。そうしているうちに、二人は、カトリーナの家へつきました。そこには大きなまどと、新しい赤いやね、白いかきねにかこまれたきれいな庭がありました。2人はへやにつうじている。ピンクのれんが道をとおって、家をよごさないように、げんかんで、スケートぐつをぬぎました。カトリーナのお父さんのカール・バン・グレックはだんろにまきをいれながら「ちょうど、まにあったね」といいました。カトリーナの

「お母さんは、その日、しみ一つないように、ゆかをみがいたので、へやじゅう、せっけんと水のいいにおいでいっぱいでした。テーブルの上にえいようのあるこい豆のスープのはいつているおわんをおきながら、カトリーナのお母さんの、バラ色のかおはにっこりとほほえみました。うすく切ったチーズやパンやケーキもありました。おなかのすいた女の子たちには、どんなにかおいしかったことでしょう。2人はお皿を洗ってふきピカピカ光るガラスの戸のついているきれいな戸だなへしまう手伝いをしました。それから2人は、カトリーナのお母さんに、手ぶくろとぼうしを見せました。「とてもかわいらしいこと」お母さんは言いました。「じょうずにあめるようになったわね。だれにあげるつもりなの？」「ジュリアンナよ。ヒルダもこのぼうしをジュリアンナにあげるの。ジュリアンナが私たちのとくべつなお友だちになってくれたらすてきだわ」とカトリーナはいいました。「どうして、ジュリアンナに2つもプレゼントをあげるの？」とカトリーナのお母さんはききました。「だって、ジュリアンナは学校中で一ばんかわいい子ですもの。みんな、とくべつなお友だちになりたがっているわ。ジュリアンナはね、うんがの上の方の大きな家に住んでいるのよ。お父さんはたくさん風車をもっているし、黒や、白の牛もたくさんかっているのよ。それにジュリアンナは、沢山すてきな洋服をもっているわ。」とヒルダが答えました。カトリーナのお母さんはいいました「だけれど、ジュリアンナは、あなたたちのおくり物がひつようかしら？ 私は、だれかほかの、あまり物をもっていない人に、おくり物をした方がよいと思うわ。」ねる時になって、カトリーナのお母さんはかべについているひき戸をあけました。戸の後ろには、たなのように見える2つのベッドがありました。2人の女の子たちがねると

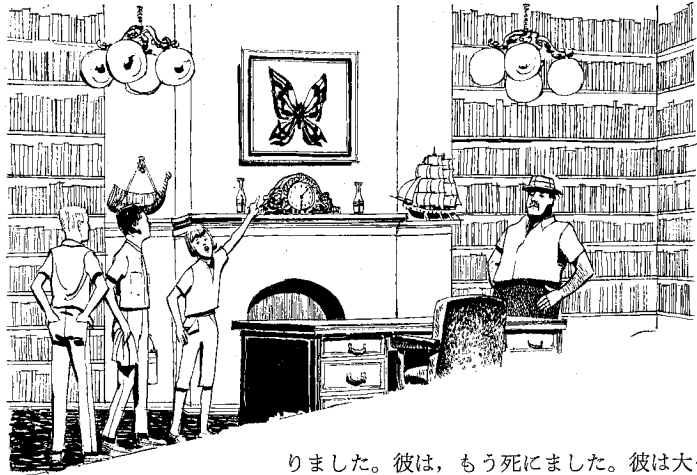
ころでした。ベッドに入ってから、2人はカトリーナのお母さんのいった事について話していました。サンタ・クロースがやって来る夕あすのばんお母さんは、夕食の後で、床にきれいな白いシーツをひろげておくことでしょう。ぼうしをかぶり、白いふちどりをした赤いようふくをきて、白いあごひげの背の高い男の人と言われているサンタ・クロースが、どの子がその年の間よい子だったかをきめると、その白いシーツの上に、おかしや木の実、おいしいケーキの雨をふらせます。そうしてサンタ・クロースは帰っていくのです。子供たちはねる前に、じぶんたちのくつをきれいにみがいてだんろの前におきます。そうすると、子供たちがねているうちに、サンタ・クロースがもう一ど来て、くつにおもちゃや、おくりものを一ぱい入れておくのです。なんてすばらしい夜なんですよ。夕あすの朝、ヒルダとカトリーナは、学校に行くときゅうで、もう一どあの小さな家の前をとおりました。同じ、色のあせた青いうわぎをきた小さな女の子が、またにわに出ていました。その子はとてもかなしそうでした。じぶんを見ている2人の少女をみると、女の子は走り出して、家の中へ、はいろいろとしました。

「こんにちわ夕あす今日は学校へ行くの？」とカトリーナは女の子に話しかけました。いいえ、弟が生まれたばかりなの、だからお母さんは、きょう、いっしょについて来て、学校に行く道をおしえられないの。」と女の子はこたえました。ヒルダとカトリーナは、小さなドアの取っ手を見ましたが、ほんとうに、そこには赤いまりがかかっていた。オランダでは、家に男の赤ちゃんが生まれると、ドアのとっ手に赤いまりをかけるのです。もしそれがピンクのまりだったら、生まれた赤ちゃんは女の子なのです。「もしお母さんがいいいいたら、私たちといっしょなら行ける

し、そうすれば道をおしえてあげられるわ」とヒルダがいいました。「だけどきょうはとも、さむいわ。それに私、かぶるぼうしがないの。きっと、サンタ・クロースがこんばん、ぼうしをおいていってくれると思うの」とその小さな女の子は言いました。2人の女の子たちは、かおを見あわせてから、うれしそうにわらい、うなづきあいました。2人はこわれたもんをあげて、にわに入って行きました。「あなたはもうぼうしを持っているわよ、だって、私たちがあたらしいのもって来てあげたんですもの、それに、そのぼうしによくあうかわいい手ぶくろもって来たのよ。きょうはサンタ・クロースの日だからよ」とカトリーナはいいました。小さな女の子は、手におくり物をもって、うれしそうにわらうと、青いめがきらきらと光り、ほほにえくぼができました。「これほんとうに私なの？……ほんとうにどうもありがとう、ありがとう。女の子はさげびました。カトリーナはなんてかわいい子だろうと思いました。その子がかなしそうなかおをしていない時は、ジュリアンとおなじぐらいいい女の子なのです。「みんな、あなたにあげるのよ」とカトリーナは女の子にいいました。「手ぶくろをはめて、ぼうしをかぶって、お母さんに、きょうは私たちと一しょに学校に行ってもいいかどうかきいてごらんさい。おべんとうをたくさんもってきたので、あなたのぶんもあるわ」「あたらしいお友だちができたわね。この女の子をよろこばせることをたくさんかんがえましようよ。」カトリーナはヒルダにいいました。「あの子を『クリスマスのお友だち』とよびましようよ、このようなお友だちが見つかってよかったわね、今までで一ばんたのしいクリスマスになるわよ。夕あす」

ちょうちよどろぼのひみつ

# モルフオとはだれか？



ミューレイ・T・プリングル作  
チャールズ・キルター絵

## これまでのあらすじ

ダニー・コリンズは、夏の間ブリクストン博物館でのアルバイトをみつけました—それは、ちょうちよの採集品の荷を解いたり、はく製の準備をしたりする仕事でした。木曜日に仕事を始める前に、彼は、パム・パターソンからブリクストン博物館が盗難にあったことを聞きました。パムと彼女の弟のパットをつれて、ダニーは、警官がたくさんいて、大さわぎになっている博物館へ急ぎました。ちょうちよだけが盗まれていました。それは、アルブライトの収集品でした。いったいどんなどろぼうなのでしょう？ ダニーと彼の友達は、この謎を解く手伝いをするに決めました。新聞社で、彼らは、マックスウェル・アルブライトが脱税(だつぜい)で有罪となり、5年のきんこに処せられた事を知

りました。彼は、もう死にました。彼は大そう悪い事をしました。これが、彼らにとって、最初の手がかりでした。

## 第三章

一つ一つの言葉をていねいに読みながら、若い三人のそうさはんは、死んだマックスウェル・アルブライトについての5つの新聞の切りぬきを調べていました。記事によると、彼はたくさん不法行為をしていたけれど、とても立ちまわりがうまいために、所得税をごまかそうとして失敗するまでは、法律も彼を取りしめる事ができませんでした。彼はその犯罪のために有罪と決まり、5年間ろうやに入れられました。警察は彼の犯したたくさん犯罪のかけには、ひみつの共犯者がいたにちがいないと確信していました。しかし、マックスウェル・アルブライトは、共犯者がいた事を認めるのを、いつも拒み続けていました。アルブライトは、うまく、不正にばく大な金をもうけました。政府は、まだはらっていない税金の代りに、そのばく大な財産の大部分を要求しました。しかし、不正な財産をみつかる事はできませんでしたし、ひこくはそれについて話すのこぼみしました。子供達は、5番目の最後の記事の切りぬきのところ

へ来ました。それは、約1年も前のもので、日付は7月8日となっていました。そして見出しには「ぜんか者ついらくして死ぬ」と出ていました。その記事には、アルブライトの家から助けを求めるかほそい叫び声が聞えて、その声をきいて近所の人々が彼の家へ来た時には、彼が急な階段の下で、ひん死の重傷を負ってたおれているのが発見されました。彼は急いで病院に運ばれましたが、次の朝、病院で死にました。死ぬ前に、アルブライトは、警察に何かを云おうとしました。「事故じゃないんだ」彼は苦しうにつぶやきました。「あいつがやったんだ……金だ…30万ドルだ」彼の声は、しだいに弱まり、ささやきになっていきました「モルフォがもっている——しかし彼は言い始めたことを言い終えないうちに死にました。新聞の記事は「調査は続行中である」という文章で結んでありました。ダニーと、パット・パムは互いに顔を見つめあいました。「モルフォ」彼らは声をそろえて言いました。

「彼がひみつのきょうはんしゃにちがいない」

### モルフォとは誰か？

「そうだ」パットは息をついて「彼がお金を持っているんだ、30万ドルだ」と続けました。「アルブライト氏はモルフォがお金を持っているとは言わなかったわ」とパムが反対意見を出しました。「彼は言いたいことを言わないうちに死んだんですもの」「そこだよ、彼が言おうとしていたのは」弟のパットが言い返しました。「ほかに何か？彼が階段から落ちたんじゃないかという点についてはどうだろうか、彼は自分のあいぼうがやったといっていたけど」声をひそめて、ドラマの時のような話し方で、パットは続けました「アルブライト氏は殺されたんだ。僕はモルフォをみつけないとは思わないよ。悪漢と殺人者

達だもの彼らが何んでちょうちょと関係あるんだい？」「僕が知りたいのはそこなんだよ」とダニーが最後にはっきり言いました。「ちょうちょとこれと何の関係があるんだろう？」「モルフォが知っているのよ、そして、私達が彼をみつけ出すのよ」とパムが言いました。しかし図書係りにきくと、彼女はファトルキャビネットをしらべてから、首をふりながらもどって来て「申し訳ないんですが、うちのファイルにはモルフォに関する資料は全然ないんですよ」と言いました。3人は考えこみながら新聞社のビルから出て来ました。僕は、アルブライトの家にはいれたらと思うんだけど」とダニーが言いました。「手がかりになる事がきつとあの家にあるに違いないよ」「できると思うよ」とパットが答えました。「うちのお父さんはアルブライト氏の家の鍵を持っているからね、彼の家もうちのお父さんの会社の名簿に名前がのっているんだから」「そりゃあ、いい♪」とダニーが叫びました。「君達のお父さんが不動産業をやっていたのを忘れていたよ、彼が許してくれるかなあ？」「彼が言うことを私がかわりに今言えるわよ」とパムがさえぎって、「絶対にダメだ♪これがお父さんの言う事よ。私はお父さんを責められないわ」「ねえ？どっちの味方なのかい君は？」とダニーが聞きました。しかし、パムの言う通りでした。パットはお父さんにアルブライト氏の家の鍵をかしてくるようになのみました。そして、その理由をきいてから、パターンソン氏は首を横にふりました。「絶対にダメだ♪」パット、お前はもっと良い事を知りたがりなさい」とお父さんは言いました。ついに、パムが言いました「お父さん、私気がついたんだけど、アルブライト氏の家の窓がおそろしくよごれているわ。あんなに外から見てきたない家は、どのお客さんも、買ったたり、かりたりしないわよ」「きのう、私もこのそばまで

車で行ったんだが、同じ事を思ったよ」とお父さんは答えました。「月曜日に、あの家を管理する人を行かせようと思っているんだ」「私達なら、今日出来るわよ」とパムがいてあんしました。「私達は仕事をちゃんとするわよ、それにお金も欲しいところなの」パターンソン氏は少しの間、考えこんでいました。「ところで、窓はきれいにしなければ…。それに家具のほこりもはらわなければならぬなあ」パムは急いで、自分が考えた事はきつとそんなじゃないだろうとつけたしました。「余分なお金は要求しないわよ」「よろしい」とパターンソン氏はしょうちしました。しかし、私は、君達がまじめに働いているか確かめに、ふいにあの家へよるつもりだ」「お父さん、ちゃんと仕事を続ける事をちかうわ」とパムが言いました。「よろしい。パムや、私はお前にこの責任を与えることにしよう」とパターンソン氏は言って、少年達の方へ向きました。「それから、君達2人の男共は彼女の言った様にするね。しょうちかい？」少年達はうなづきました。パットは「それじゃお父さん、僕達に鍵をかしてくれませんか？」「鍵はいらないよ」という答えが返ってきました。「ベントン氏が隣りに住んでいて、火事や他の非常時のために鍵をもっているからね。彼がきつと君達を家の中に入れてくれるだろうよ。君達が行く間に、彼に電話をしておくからね」「ベントン氏…あの自動車商のですか？」とダニーが深く考えこみました。パターンソン氏はうなづいて「そうだよ、ダニー君。いい人だよ。非常に協力的だね、隣人のよしみで、私の代りにあそこを管理する事を申し出てくれてね」ダニーはベントン氏を知っていました。ほとんどの子供達は彼を知っていました。ハーヴィー・ベントンは自動車販売業をやっている人でした。しかし新品や中古のオートバイや自転車も売っていました。大ていの子供達が彼から自転車

を買っていました。そして、その自転車がダメになったり、修理の点検に出したりする必要がある時になると彼の修理屋に皆、自転車を出しました。アルブライト氏の家は街のはずれにあつて、中くらいの規模で、古い英国式に灰色の石で建てられていました。「あれが、アルブライト氏の家だね、とすると、となりのあの家がベントン氏の家にならぬわね」とと灰色の石を指さしながらパムが言いました。一人の男の人が、おもての方に出ていて、しばふに水をまいていました。若者達が近くまで、自転車をのりつけると、自動車商とわかりました」彼はにっこり笑つてあいさつをしました。自転車のハンドルにかかつて、がんがん音を立てているバケツや、パムのバケツに入っているぞう巾や、窓のそうじ道具を見ながら、ベントン氏は「あなた達がそうじ班でしょう」。

パターンソンさんが2〜3分前に私のところに電話をかけて来ましてね」ベントン氏は再び、ホースをとり上げて「もしいる物があつたら、言って下さい」とつけ加えました。「水以外なら全部必要な物を持っていますので…」とパムが言いました。「あそこでは、全部が止められているんです。暖房も、電気水道、全部なんです。ですから水はうちの方からさし上げましょう」とベントン氏は家の所でうなづきました。子供たちは時間をムダにしないで、バケツに水を一杯入れると、窓の高い部分をふくために、きつたつをかりて、仕事にとりかかりました。「まず、外から始めましょう」とパムが決めました。1時間以上も少々きつい仕事をやりとげると、窓の外の仕事は終わりました。しかし、彼らの努力にもかかわらず、あまりきれいになつたとは思えませんでした。窓ガラスはまだきたなく見えました。パムはがっかりして、まゆをしかめました「きたないのは、ほとんどが中の方なのね」「よし、中へ入ろう、そしてモ

ルフォに関する事を見つけ出そう」とパットが云いました。3人は調査を進めるために、3人だけで家に入りたと思いました。彼らが家の中に入るか入らないうちに、ベントン氏も入って来ました。彼は部屋から部屋と3人について来ました。彼のために、3人はいらいらして来ました。そして彼が自分の家に帰るように願うのでした。「ここには、何をかけていたんだろう？」とパットがすばやく耳うちをしました。ダニーは肩をすくめて「彼は、僕達は何も盗まないかどうか確かめたいんだよ」「きっと、私達が本当に忙しくて、彼を無視すれば彼きっと帰るわよ」とパムが提案をしました。しかし効果はありませんでした。自動車屋はあいかわらず、何も言わずにかんししながら、うろうろしていました。ついに彼は「君達は何も見つからないと思いますよ」と言いました。パットは彼を見つめました。「手がかりですよ。私のいうのは」とベントン氏は言いました「君達は、博物館の盗難事件を解決しようとしているんだろう？」パットは、びっくりして物が言えず、ただうなづくだけでした。同じように驚ろいて、ダニーは「ベントンさん、何んで私達がこの事件を調べているのがわかったのですか？」と聞きました。「誰かは私に知らせてくれるものですよ」と答えました。なぜですか？ひみつにしようという事だったんですか？」ダニーは、ゆっくり首をふって「いいえ、ベントンさんそういう事ではないと思います。あなたは、アルブライト氏をごぞんじですね。」とダニーが言いました。ベントンはうなづいて「もちろんですよ。私達は隣り同志でしたからね」と言いました。彼は、今までに、モルフォという様な名前の人について話した事がありましたか？」とダニーは次の質問をしました。自動車商は首を振って「私には言わなかったなあ、モルフォなんて。ずい分変わった名前ですね。いや、ま

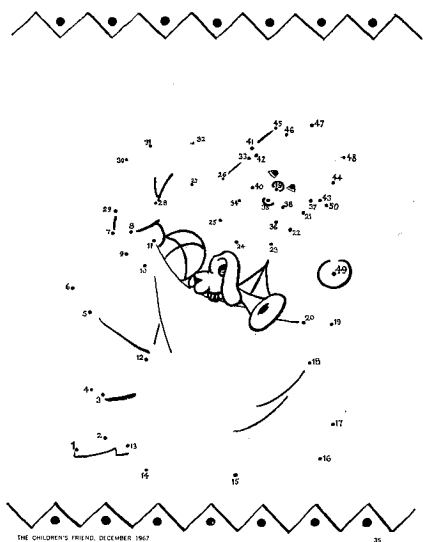
てよ、前に一度その名前を聞いた事がある様な気がする。ところでそのモルフォという人がこの事件とどういふ関係があるんですか？「私達は、彼がアルブライト氏のひみつのきょうはんしゃだと思ふんです」とパムがあいづちをうちながら言いました。「ほんとうですか？」ベントン氏はほとんど言葉をつまらせて、口をすぼめ、考えこみました。「私達はこの家で、彼について何か見つかると思っているんです」とパットが言いたしました。再び、ベントン氏は首をふり「私は見つからないと思いますよ」警察がマックスのあの不幸な事件の時に、ここにやって来て、かなり捜査をして行きましたからね」子供達は、家の中に入った時からずっと仕事を続けていたので、最後の部屋の方へやって来ました。その部屋も窓をそうじするの必要がありました。「マックスの書斎です」戸びらをあけながら。ベントン氏は言いました「ここは、彼のお気に入りの部屋だったんですよ」書斎は、とても大きく、正方形で、豪華に飾りつけてありました。入口から、のぞきこみながら、3人は右の方に暖炉がみえました。暖炉の上には飾り時計が置いてあって、その両側に磁器の花びんが並んでいました。暖炉の片方はしには飾り用の帆船の模型がのっていて、もう一方には、古い英国のつので出来た酒入れがありました。部屋のほぼ中央に、大きなマホガニー製の机がありました。大きな、いかにも楽そうな皮ばりの一組の椅子や、足台、小さなテーブルやランプ、びょうぶ、といったような物がありました。ほとんど全部の壁という壁は、きれいに製本された何百冊という本の並んでいる本棚でおおわれていました。小さな片すみに、背の高い金属製のファイル用のキャビネットが置いてありました。「しかし、パムには、その部屋全部の中で、手がかりになる物は一つしかなく、他はとるに足らぬ物のように思えました。「ねえ、

あれを見てみましょうよ」と息をついて「今までに、あんなに美しい物を見た事があって？」と言いました。お姉さんが、暖炉の方を見つめているので、弟のパットは、暖炉の上ののっている帆船の模型の事を言っているのだらうと思って「ヤー、確かにすごいや、僕もあんなのが欲しいなあ」と言いました。「私の言っているのはあれよ」とパムが叫びました。彼女は、暖炉の上にかかっている、金の額に入っている一枚の絵をさしました。それは羽を広げている豪華な青いちょうちよの絵でした。ダニーは自分がどうして、前にそ

れに気がつかなかったんだらうと不思議でした。本当にそれは部屋の中で一番目立つ物でした。「アルブライト氏はきっとちょうちよが好きだったんですね、ちょうちよの絵さえ集めていたんですからね」とダニーが言いました。「きれいですね」とベントン氏も云いました。しかし、マックス、いや、アルブライト氏はあの絵を買ったんじゃないで、自分で画いたんですよ、不思議な事ですよ。もし彼が本気になってやったら、本当に天才的な芸術家になれたでしょうね。しかしごぞんじのように、あれが彼が画いたたった一つの絵なんですよ」「彼はきっと、絵を書いたり、ちょうちよや、あんながらくたを集めたりして、きっと変りものだったんですね」とパットが言いました。「あんなに、すてきな絵はないわ」とパムがため息をつきました。「ねえ、あれもすてきだけど、僕らはまだ仕事があるんだよ。まだ、誰がモルフォかしらべなければ」とパットがあわてて言いました。彼はベントン氏の方を心配そうに見て「本当に、モルフォ氏について何も聞いていませんか？」とききました。ベントン氏は首をふって「私はどうも、お手伝いが出来ませんで、マックスが刑務所へ行く前の事なら良く知っているんですが。もちろん、私は彼が正直な男だったとは思いませんでしたし、モルフォなんて名前も聞いた事がないですよ」と言いました。「それじゃ、僕達は本当に困まっちゃうなあ」とパットは、むっとして、ぶつぶつ言いました。「誰もこの、おいはれモルフォについて聞いたことがないんじゃ、その名前の人を見つける事も出来ないね。一体、誰の事で、どこにいるのかなあ」とパットは腹立たしそうな声で言いました。しかし誰も、それについて答えませんでした。謎につつまれたモルフォの正体と、行くえば、本当に大きな謎でした。

クリスマス、イヴがくるまえに

このてんをむすんで、できたえに、いろをぬりましょう。



(つづく)